

第一回リレー小説「第四学群」赤組三番手

不明

周りを見渡すと、ここには「もの」と言えるようなものがほとんどないことに気付いた。目に見える範囲で挙げられる「もの」と言えば、僕が今座っている真っ白なベッド、姉さんが座っている黒くて硬質な椅子、コーヒークップを置いてある透明のガラスでできたテーブル、そして僕らの着ている服、コーヒール、ワインナー、魚肉ソーセージ、それくらいだ。それ以外には、本当に何も無い。ただただ真っ白な空間が広がっているだけだ。部屋もない。棚もない。冷蔵庫もない。キッチンもない。「何もないでしょ」

姉さんはきよるきよるしている僕に気付いたようだ。「何もないね」

見渡せば見渡すほど、この場所の「何もなさ」がどんどん僕を侵食していく気がする。無限に続く真っ白な空間が、解放感と同時につかみどころのない気持ち悪さを僕に与えるのだ。それは、松見池を前にした時の寒気のような吐き気のような、あの感覚に似ていた。でも、そこで偶然姉さんの着ているスカートが目に入り、気持ち悪さは海の波が引いていくかのようににすーっと消えていった。そのかわりに、嬉しさや懐かしさのようなものがごちゃ混ぜになりながら僕の中にこみ上げてきた。一度引いた波が別の波となって帰ってきたみたいだ。目がしらが熱くなる。波はそのまま目を通じて流れ出る。

僕が泣いている間、姉さんはずつと僕の隣に腰を下ろしてワインナーをかじっていた。何も言わず、何も聞かず、ただひたすら、僕の言うことにならずながらワインナーをかじっていた。たぶん、普通こういう場面でワインナーをかじるのはおかしいのかもしれない。でも、その行為は結構この場に馴染んでいるように感じたし、姉さんらしいとも思った。僕は涙を流し、姉さんはワインナーをかじる。なかなかいい光景だ。

「魚肉ソーセージも全部食べちゃった」

姉さんは昔からよく食べる。自分のものでも他人のものでも構わず食べる。僕は昔から魚肉ソーセージが好きだったのだが、姉さんのせいで、あとで食べようと思っただけで冷蔵庫に入れておいた魚肉ソーセージが実際に僕の口の中に入ったことは、たぶん数えるほどしかないと思う。僕がそれを怒ると、姉さんは決まって、「食べたかったんだもん」と言った。最初は僕もそんな言葉では納得しなかったが、小学校高学年になる頃には、その言葉は聞くとなぜか気持ち治まるようになってしまった。姉さんは本当に「食べたかった」のだ。もうそれは仕方ないことなのである。たぶん、姉さんにとって魚肉ソーセージを食べることが生きることと同義なのだ。僕がそれを咎めたところで何も生まれない。それ

に、僕の魚肉ソーセージが姉さんの胃の中へ消えてしまった次の日の冷蔵庫には、なぜかたいい新しい魚肉ソーセージが入っていた。喜ぶ僕を見て、姉さんは素知らぬ顔で「良かったじゃない」と言う。そして二人でそれを食べるのだ。

でも、僕だっていくら好きだからと言っても毎回喜ぶわけではない。体調や機嫌が悪い時は手をつけない場合だってある。そんな時でも姉さんは変わらず、一人で美味しそうに魚肉ソーセージを食べる。僕はそれを見ながら、高い山の頂上から見える大パノラマを目の前にした時にもらず、あの隙間風のようなため息をつくのだ。

「食べたかったんだろ？ 魚肉ソーセージ」

「うん」

「べつにいいよ。それにもともと姉さんが出してくれたものだしさ」

「まだお腹すいてる？」

「いや、もう大丈夫」

「そう」

涙はすでに乾いていた。

今考えてみれば、冷蔵庫に入っていた新しい魚肉ソーセージは姉さんが買ってきたものだったのだと分かる。あの頃だってよく考えれば分かってもおかしくなかっただろう。でも、小学生の僕はそんなことに思い至ることはなかった。ただただ姉さんの「食べたかったんだもん」というまっすぐな言葉に圧倒され、そして、次の日の冷蔵庫に魚肉ソーセージが入っているという事実を驚喜した。

「姉さんはさ」

たぶん一番尋ねたかったことだ。隣に座る姉さんは小首をかしげながら僕の口が動き出すのを待っている。初夏の朝に漂うような淡い緊張感が唇をかすめ、それが足先まで伝わってかすかな筋肉の痙攣が生まれる。喉元を過ぎる唾のごくんという音がやけに大きく聞こえた。

「姉さんは、死んでるの？」

意外と変わらない。この一言によって何かが変わってしまうかもしれないという不安は、ほとんど必要のないものだったようだ。僕と姉さんの間にそつと横たわる何か――それはある種の気分のようなものだ――は、そのまま穏やかに漂っている。

「ある意味死んでるわ」

ある意味死んでるわ。僕は姉さんの言葉を心の中で繰り返してみた。ある意味死んでるわ。

「そして、ある意味では生きてるのよ」

ある意味では生きてるのよ。

「第四学群では、死も生も同じことなの」

死んでいることと生きてることが同じこと。姉さんの話すその言葉は、何か深遠なことを示しているようでありながら、実際は何の意味もなしていないように思えないこともない。しかし、何の意味もなしていないとい

うことが、ことの本質なのかもしれない。姉さんはそういう人だ。そして、第四学群とはたぶんそういう場所なのだ。

「3Sって知ってるわよね」

「スタデイ、セックス、スーサイド、だろ」

姉さんは立ち上がり、僕の隣を離れた。黒いタイツが白い空間を踏む。

「そんな生活、とつても退屈だと思わない？」

両手を広げ、子供が飛行機の真似事をする時のような態勢になる。そのままゆつくりと体を揺らしながら歩く。ベッドや、椅子や、テーブルの周りを、大ざっぱになぞるような感じ。ちよつと楽しそうだ。

「勉強して、セックスして、最後に自殺してはい終了。そんな人生、絶対に送りたいわ」

「そうだね」

「でも、これはきつと別の解釈が可能よ」

「別の解釈」

姉さんの動きが少しずつ子供みたいになっていく。ちよつと走ったり、くるつと回ったり、寝転がってみたり。邪魔なものは何もない。ここは姉さんの世界だ。あるいは姉さんが世界だ。世界が姉さんだ。

「スタデイは社会的に認められた行為、社会的に意義ある行為。セックスは個人的な行為、個人の欲求を満たすための行為。外では勉強、内ではセックス。外的な行為と内的な行為」

必ずしもそうとは言えないだろう、と感じた。でも、姉さんは一つの解釈を語っているに過ぎない。実際にどうなのか、なんて姉さんには関係のないことかもしれない。そしてそれは同時に、第四学群にも関係のないことなのだ。この問題は、どんな魚肉ソーセージを食べたいか、ということと同じだ。そこでは、魚肉ソーセージとは本来どんなものなのか、ということがさほど重要にならない。

「外としてのスタデイ、内としてのセックス、それらから逸脱したものとしてスーサイドがあるの。スーサイドは、スタデイでもセックスでも「ない」という仕方定義され、だから、スタデイでもセックスでも「ない」という意味で無限の広がりを見せるわ」

僕は黙って聞き続ける。姉さんは逆立ちを始めた。

「普通、スーサイド——自殺——という言葉は「死」の雰囲気強く持っている。でも、スタデイでもセックスでもない、という定義づけのみをするなら、そこに死とか生とかいう要素を本質的なものとして付け加える必要はないのよ。生と死の区別なんてもう重要じゃなくなる。スーサイドはある意味であらゆる定義づけがされなくなり、同時にあらゆる定義づけを受け入れるようになる。それは無限ということ。私たちのやることは、そこでどんな定義を選び取るか、ということだけ。どんな定義を選びたいか、ということだけを考えるの。それが可

能なのは、『スタデイ、セックス』と『スーサイド』が『A』と『B』っていうふうに表示されるものじゃなく、『A』と『A以外』っていうふうに表示されるものだから。その無限な『A以外』が第四学群なのよ」

よく分からなかった。少し寂しい気がした。

「第三学群のF棟で自殺が多発するっていう話、聞いたことある？」

「あるよ」

「この自殺は、私の言うようなスーサイドじゃないのよ。これはただの死。生と単純に対置されるただの死」

姉さんはこちらを向いて立ち止まる。

「何かが気に入らないから死ぬ。ただの死よ」

もうほとんど意味は分からなかったけれど、何かが変わった。それだけは感じられた。違和感。気持ち悪さ。松見池を目の前にした時の感覚とは違う。何もないこの場所にほんの少しだけミスマッチな何か。姉さんは特に苛立っているわけではない。語気は穏やかだ。そもそも、ミスマッチということさえこの場所では意味をなさないかもしれない。でもやはり、そこには見逃してはいけない何かが「ある」と思う。

「でも、姉さんだって自殺したじゃないか」

「してないわよ」

早い、と思った。姉さんとの会話はたいいてい、一拍一泊がもつと長い。

「私は、鯉が食べたかっただけ」

「鯉」

「松見池に飛び込みたかっただけ」

「松見池」

不意に、『秋にとつては、松美池に飛び込むということ、第四学群へ行くことと同義だったんじゃないのかしら』という香坂さんの言葉が蘇る。本当にそうだったのか？

「みんな、姉さんのこと心配してるよ」

「みんな？」

「文芸部だった人たち。三輪さんとか、香坂さんとか」
ふつ、と鼻で笑う音が響く。スカートの裾が不気味に揺れる。

「文芸部には戻りたくないな」

やっぱりだ、と思う。

「あれは自殺者の集まりよ。ただの死んだ人たちよ。」
姉さんは最初に座っていた黒い硬質な椅子に座り、どこから持ってきたのか、魚肉ソーセージを袋から取り出して食べ始めた。あつ、と思う。冷蔵庫に入っていた魚肉ソーセージはなぜなくなっていたか。「食べたかった」からだ。だから僕は、隙間風のようなため息をつきながらそれを受け入れられたんだ。今の僕がため息をつくとしたら、それはどんなため息なんだろう。

「それ、松見池の鯉で作ったんだろ？」

「そうよ」

「姉さん、除籍になるよ」

「ならないわよ」

姉さんはまた鼻で笑う。その声は真つ白な空間の中で静かに消えていった。

僕と姉さんは松見池の前に立っている。深夜の大学構内はいくつかの薄明るい街灯に照らされてゆらゆらと自らを保っている。月明かりは弱い。時々自転車がガラガラと目の前を通り過ぎていき、その音の異様な大きさに僕は肩を震わせる。姉さんが池の周りの芝生を何歩か踏んでから言う。

「三輪さんと恵美によく」

僕は何も言うことができず、かろうじてこくと肯いた。また一台自転車が通り過ぎる。

「じゃあ、ばいばい」

姉さんは僕に背を向け、松見池の方に向き直る。そして、しゃがみながら池を凝視する。僕はその様子を見ながら深呼吸を繰り返していた。怖かった。不安だった。その気持ちを信じたくなかった。

でも、やっぱり気のせいではなかった。

「帰れない」

姉さんの今にも泣きそうな声が聞こえる。僕は耐えきれなくなつて目を閉じる。

「なんで、帰れないの？」

僕は姉さんの声を聞きながらその場に立ち尽くしていた。夜の黒が僕へ向かつて一気に覆いかぶさってくる。重くて、痛くて、寂しくて。でも、きっと僕は強くならなければならない。スカート裾はただ頼りなく揺れていた。もう、僕はそれをつかめない。

姉さんは、第四学群を除籍になつたんだ。